



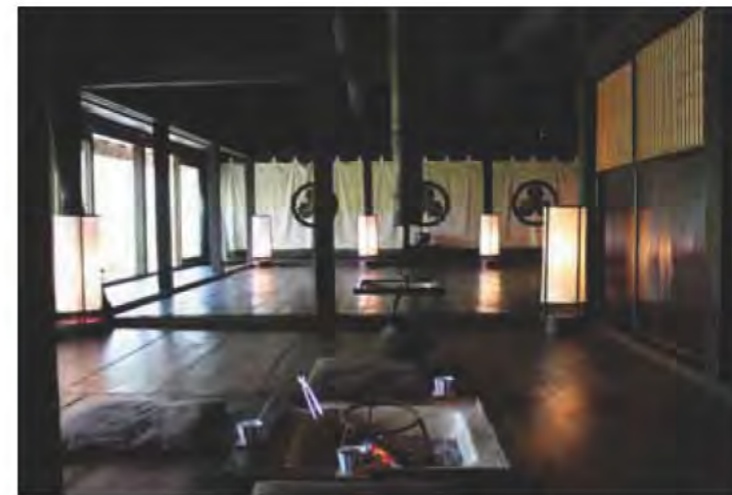
刃物の町として知られる大阪府堺で、水野鍛錬所を訪ねたアレックス・カーさん。5代目当主の水野淳さんと、伝統の継承について語り合う。

chapter 1

地域資源の可能性を探して

— アレックス・カー 大阪を訪ねる —

全国各地で、数多くの集落および古民家の再生事業に携わってきた東洋文化研究家、アレックス・カーさん。伝統を武器に産業の活性化と観光資源としての活用に取り組む大阪に、職人や農家を訪ねた。



アレックス・カーさんが1973年、徳島県東祖谷に購入した築300年の古民家「麩庵(ちいおり)」。古民家再生に取り組むきっかけとなった。

若き日の、古民家との出会い

東洋文化研究家のアレックス・カーさんは、アメリカ人でありながらも、日本の美しい景観に魅了された者の一人である。イェール大学で日本文化を、慶應義塾大学で日本語を学んだ彼は、学生時代にバイクで全国各地を走り回り、当時誰も見向きもしなかった田舎の原風景や、高度経済成長の代償として失われつつある伝統文化を、自身の「国際的な目線」に従い、夢中になって探し歩いた。

そんな若き日の旅路で、彼が運命に導かれるようにして出会ったのが、「日本の秘境100選」に選ばれた、徳島県の祖谷(いや)に立つ、築300年の古民家であった。彼は一期一会の縁を信じ、これを手入。自らの手で修復を手掛ける。振り返ると、それがいま我々の知る、景観および古民家再生コンサルタントとしてのアレックス・カーの始まりであった。

地域活性化のヒントを探して

現在、カーさんは、徳島県三好市東祖谷、

香川県宇多津町、石川県加賀橋立、福井県坂井市、大分県竹田市、長崎県小値賀島、奈良県十津川村など日本の各地を舞台に、古民家の宿泊体験を基軸とした滞在型観光事業の指揮を執る。そんなカーさんは、日本の地域活性化にどんな可能性を見出しているのか。鍛冶や錫器製作などの伝統工芸や、伝統野菜の栽培を観光資源として生かすべく、行政と連携した取り組みが盛んな大阪を訪ね、生産者たちとの対話から、そのヒントを探った。



伝統文化を残すには、
人とお金を連れてきてくれる
観光の力が不可欠です

—— アレックス・カー

アレックス・カー
東洋文化研究家。1952年、アメリカ生まれ。京都の町屋を修復し、宿泊施設として開業させたことを発端に、景観と古民家再生のコンサルタントとして全国規模で活躍。著書に『美しい日本の残像』(朝日新聞出版)、『犬と鬼』(講談社)、『ニッポン景観論』(集英社)など。



水野鍛錬所
 大阪府堺市堺区桜之町西1-1-27
 tel.072-229-3253
 www.mizunotanrenjo.jp/

伝統の継承に向き合う 二者二様の取り組みに触れて



1872年創業の堺の名鍛冶、水野鍛錬所。法隆寺五重塔の魔除け鎌を鍛造奉納し、日本刀と庖丁の火造り・鍛造までを手掛ける。

伝統が息づく大阪の街を訪ねる

「おはようございます」—— 早朝の新大阪駅に、朗らかな笑顔で現れたアレックス・カーさん。荷物は肩に掛けたリュックひとつと、手に持ったカメラ1台。いかにも旅慣れた雰囲気は伊達ではなく、前日に香川県から戻ったばかりで、荷を解く間もなく、またすぐに出掛けてきたのだという。

「とにかく、講演や地域の再生事業の相談やらで、全国を飛び回る毎日ですから。家にいるよりも、乗り物に乗っている時間のほうが長いかもしれませんね」

そんなカーさんとともに、この日我々は伝

統工芸の工房を訪れる予定を組んでいた。安土桃山時代からの商人文化に支えられ、さまざまな伝統工芸が開いた街、大阪。彼の知見やノウハウから、そこに見出される新たな可能性や観光資源のようなものがあるのではないか、あるいはむしろ彼がインスピレーションを得るような事柄もあるのでないかといった期待に胸が高鳴る。

「これは美しい建物ですね」と彼の声にわかに弾む。クルマが最初に着いた場所は、打刃物の生産地として知られる堺市の「水野鍛錬所」。1872年に創業した同所は、紀州街道に面して、瓦屋根の美しい佇まい。「ようこそ」と笑顔で迎えてくれたのは、5代



大阪錫器
 大阪府大阪市東住吉区田辺6-6-15
 tel.06-6628-6731
 www.osakasuzuki.co.jp/

江戸時代、京都錫の流れを汲む初代伊兵衛により創業した大阪錫器。伝統製法を駆使し、実用性にも優れた製品をつくる。

目当主の水野淳さん。流暢な日本語を話すカーさんに驚きながらも、さっそく奥の鍛冶場へと案内してくれた。

ふいごで松炭に火を熾し、玉鋼をくべる。「コンピュータ管理のものづくりもある中で、自分は手仕事でこそ最高の鍛冶ができる」と語るその手に渾身の力を込めて、水野さんは鎚を振り下ろす。カーさんは、迫力に感嘆の声を上げる。「今日まで、徹底して伝統技法にこだわってきたのは素晴らしいこと。見る価値があるから、大勢の観光客が訪れる。見学した観光客は、感動の代償に庖丁を買っていく。ムラノガラスで有名なイタリアのベネチア同様、堺でもこの好循環が成

り立っているとしたら、参考にすべきお手本ですね」

時代にあわせた積極的な変革

次に訪ねたのは、江戸時代に普及した錫器の老舗「大阪錫器」。「現代の名工」にも選ばれる今井達昌さんは、むしろ時代のニーズにアンテナを張り巡らし、常に求められる商品をつくることで、伝統の継承に努めてきたという。

「伝統工芸は、途絶えさせてしまっただけです。だからこそ、時代のニーズにあった商品開発を行ってききました。最近は大ブレンダーが人気ですね」と語る今井さんに、

カーさんも頷くことしきり。使い勝手を工夫し尽くした工房の設えにも興味津々な様子で、しきりにシャッターを切っていた。

「ここが素晴らしいのは、自ら積極的に変革を求め、スタイリッシュなWEBサイトでは情報発信から販売までも手掛けていること。国の伝統的工芸品に指定されながらも、それに甘んじず、世の中と能動的にコミュニケーションを求め姿勢は、大阪人の気質なんではないでしょうか。いくらいいものをつくっていても、知られないと埋もれてしまう。今井さんの姿勢は、皆が見習わないといけないね」



上／伝統野菜を育てる農家、細田仙次さんと語るカーさん。「農業を極力使っていない証拠に、チョウがいっぱい飛んでますね」下・左から／勝間南瓜(こつまなんさん)は深い縦溝を持った立体的な形が特徴。田辺大根の種を手に載せて見せてくれた細田さん。田辺大根は小ぶりながら甘みがある。



上／土間に梁と束(つか)、貫(ぬぎ)で構成する壮大な小屋組を持つ山口家住宅の外観。右ベージュ／土間に面した中の中。江戸時代を通じて増築が加えられたため、部屋によって微妙に異なる素材や工法が見られる。

山口家住宅
大阪府堺市堺区錦之町東1丁-2-31
tel.072-224-1155

ユニークネス(固有性)を武器に、観光資源を打ち出す

“なにわの伝統野菜”の復活

アレックス・カーさんが次に向かった先は、大阪市東住吉区にある野菜畑。府と市が認証する「なにわの伝統野菜」の生産者であり、大阪市なにわの伝統野菜生産者協議会・会長でもある細田仙次さんと畑で待ち合わせた。

「遠路はるばる訪ねてきてくれて恐縮です」と声を掛けてくれた細田さん。人懐っこい笑顔で、まずはその何たるかを分かりやすく説明してくれた。

そもそも、なにわの伝統野菜とは、かつて「天下の台所」と呼ばれた大阪の100年ほど前の食卓に並んでいた地域固有の野菜のこと。品種改良によって多くが消えていったが、近年になり、地域活性化の観点から再び注目

を集め、行政の支援も得ながら栽培されているのだという。現在大阪市では田辺大根、勝間南瓜など8種類が、府・市協同の認証表示シールを貼られて出荷され、大阪の新たな特産品としての認知を高めつつある。「最近では学校給食の材料にも使ってもらっています」と細田さんは目を細める。

「僕は全国で過疎の村の再生事業に取り組んでいますが、地域固有の伝統野菜を探し出して育てれば産業にもなるし、観光の目玉にもなるね。ヒントをもらいました!」と、カーさんの得るものは大きかったようだ。

そこにしかない“本物”

畑を後にし、最後に向かった先は堺の町衆文化を色濃く残す山口家住宅。重要文化財にも指定される江戸時代初期の古民家である。

「僕も築400年の古民家を所有していますが、特に小屋組の壮大な空間が広がる土間部分は文句なしに素晴らしい!日本が世界に誇るべき文化財として、ぜひ多くの人に見てもらいたいですね」といささか興奮気味。中をひと通り見学した後、しばし土間に佇み、その感動を静かに記憶のひだにたたみ込もうとしているかのようであった。

「大阪の卓越した文化に触れて改めて認識したのですが、伝統技法にせよ、土地固有の農産物にせよ、そこにしかない本物は必ずや観光を通して、その地域に人とお金を運ぶことができます。ユニークネスという観点で、もう一度、自分の関わる再生事業を見つめ直してみたいと思います」とカーさん。その視線は、すでに次の旅先へと向けられているかのようだった。

